

学校と地域の関係性を変えた

「はじめの一步」集

学校と地域を協働する関係に変えていく、
というのは、壮大なテーマだけに手に負えないような気がしてきます。
ですが、今は連携が取れている学校も、始まりは誰かの小さな一歩だったかもしれません。
そのファーストアクションに焦点を絞る形で、さまざまな学校のお話を伺いました。
ご自身の学校現場に応用できそうな「一歩目」が見つければ幸いです。

Tips

1

話す

まず誰かに話してみる、
相談してみる

Tips

2

書き出す

考えていることを
紙に書き出してみる

Tips

3

受け止める

地域や企業など
学校外の提案を聞いてみる

Tips

4

校内で頼る

学校内の先駆者や
専門家に相談する

Tips

5

校外を頼る

学校の外にも
頼れる人を見つける

Tips

6

小さく始める

できる範囲から始めて
広げていく

Tips

7

磨き込む

よりよい活動に
進化させていく

取材・文／松井大助
イラスト／桔川シン





話す

…まず誰かに話してみる、相談してみる

普通科の探究活動『くまたん』において、生徒たちが「自分の興味・関心」と「地域資源」を掛け合わせて、課題の発見とその解決に挑む。

一緒に考えてくれる相談相手との出会いが、 地域連携を加速させた

本校では、以前から森林環境科は地域の中で学んでいましたが、2018年度より普通科でも地域連携を推進してきました。きっかけは、愛媛県の教育事業でSDGs学習を始めたことです。一般の社会人のなかにも「生徒たちに授業やお話をしてほしい」と思える方がたくさんいることに気づいたのです。

そこで町役場に出向き、観光や移住、自然などの話ができる方はいませんかという「話す」ことをしました。すると、当初はふるさと創生課の課長が、役場の組織改編後はまちづくり営業課の副課長が、親身に相談にのってください、役場の職員の方はもちろん、中間支援組織ゆりラボさんや、美術館の学芸員、地域おこし協力隊員など、さまざまな方につなげてくださったのです。そうして連携を深めることができました。

相談しても、反応が薄い場合もあると思います。ですがどんどん話していくと、お願いした側・お願いされた側の関係を超えて、「この地域や子どもたちのために何かできるか」を、対等な立場で一緒に考えてくれる方とも出会えるんですね。そうして互いの事情を本音で話し合える方ができると、連携に弾みがつくと感じています。

上浮穴高校（愛媛・県立）
進路指導課長 白石将高先生

普通科と森林環境科がある。森林環境科では以前より地元で根差した課題研究を実施、普通科でも地域連携を推進。普通科の「くまたん」は以下 URL も参照。<https://kamiukena-h.esnet.ed.jp/file/6452>



書き出す

…考えていることを紙に書き出してみる

1年生の探究活動『Inage Image』において、地元の企業や公的機関、NPOなどから出された“ミッション”の解決策を生徒たちが探究する。

企画書で考えを整理・共有することで、 約40団体との連携を実現

地域と連携して探究活動をしたい。そう思った私がまずしたことは、地元の商工会議所や商店街の集まりで話すことで、よい反応はありましたが、「探究って?」という戸惑いも見られました。そこで取り組んだのが、自分たちのやりたいことやその意図を、企画書として「書き出す」ことです。どんな活動で、どういう協力を得たいのか。なぜこういうことを始めるのか。会社経営をする知人に助言をもらい、企業の人に届きやすい内容にすることも意識しました。そうして私が作った原案を、ほかの先生方にも見てもらって了承を得ました。

企画書を用意すると、協力を打診した団体の方が上司にもその文書で説明できるようになり、伝言ゲームで話が霧散することがなくなりました。ほかの先生方もおののにつながる外部の方との相談に企画書を活用、より話を進めやすくなりました。ゼロからの立ち上げでしたが、今では約40団体の協力を得られるように。探究した生徒たちの発案を、協力者の方々が取り入れて、公園の遊具やバスツアーを実現してくださるなど、まさに社会とつながる学びとなっています。

※地域連携のための企画書サンプル [ダウンロード可](#)

敬愛学園高校(千葉・私立)
教頭 石脇 淳先生

1年次に全生徒が地域密着の探究活動を行い、2年次以降は文系と理系に分かれて自分の問いを探究。探究活動の全容は以下URLの10～13ページも参照。<http://www.hs-keiai.ac.jp/nyuushi/pamphlet/>



受け止める

… 地域や企業など学校外の提案を聞いてみる

1年次の前半に、自分探究として約50人の社会人との対話などで自分を見つめ、後半は課題探究として身近な困りごとの解決を目指す。

外部の提案から教員が学び、 協働することでよりよい活動へ

本校では2023年度に、地元テレビ局と民間教育企業が支援してくれる「ひなた探究」を導入しました。県内の企業から生きた課題をもらい、用意されたICT教材を活用し、生徒が探究する活動です。私たち教員には探究活動の実体験がなく、進め方もまだ不慣れでした。だからこそ外部と連携し、提案を「受け止める」なかで、ここは本校に合うな、ここはアレンジしたいな、などと模索していこうとしたのです。

2024年度には、県のキャリア教育コーディネーターの1人が本校に専属で入ってくれることに。その方にも、我々のやりたいことから「こういうのが苦手で、どうしたらいいでしょう」という弱みまで正直に話し、知恵をもらって活動内容を一緒に作り込みました。結果、まずは多様な社会人約50名を校内にお呼びし、その対話から生徒が自分を探究、そのあとで地域課題に挑む、という今の活動の流れができました。

予算の関係もあって今は「ひなた探究」はしていませんが、今後も生徒が外に出るだけでなく、さまざまな社会人の方が「学校に来やすい」と思ってもらえる雰囲気高めめることで、社会に開かれた学校を実現していきたいと思っています。

宮崎商業高校(宮崎・県立)
キャリア教育支援教員 野口佐矢香先生

商業マネジメント科、情報ソリューション科、グローバル経済科がある。
各科の特徴や、日々の活動については生徒主体で運営している以下
公式SNSも参照。https://www.instagram.com/miyasho_high_school/



校内で頼る

…学校内の先駆者や専門家に相談する

生徒企画のまちの活性化プロジェクト、専門的に学んだICTや保育の知見を活かした地域支援活動など、探究活動を軸とした教育を展開。

校内で相談し合うことが、 生徒の背中を押す力にもなった

本校に来たのは7年前。地域連携が始まっていましたが、私は前任校までその経験がまったくなく、「校内で頼る」ことから始めました。連携の軸となっていた同僚に頼ったのです。

例えば、地域の人の協力を得る際は、私から連絡するほか、すでに関係性のある同僚からも一声かけてもらいました。「地域でこんな企画をしたい」と生徒から相談されたときも、どう助言するかを考えたら、その案をまず同僚にも伝え、意見をもらいました。一人で抱え込まなかったことで、未知の領域に踏み込む不安が薄れ、生徒とも前向きに関われました。

4年前から専属のコーディネーターも着任。我々がその方も頼っていくと、生徒にも良い影響が生まれました。以前は教員の手之余のような話は腰が引けましたが、今はまずコーディネーターと話し合います。その姿を見ていた生徒から「だから先生に相談しようと思った」と言われたのです。

地域での生徒主体の活動は、成功したと言えるのは10やって1つか2つです。ですが、失敗もしながら「次はこうしよう」「これができた」と成長していく姿を見て、挑戦した10のすべてが意義ある活動だと思うようになりました。

飯野高校(宮崎・県立)
進路指導部 千本泰史先生

2026年度より普通科とみらい探究科に。全国グローバルリーダーズサミット(グローバルに活動する生徒や社会人が集合)主催。地域活動等は以下SNSも参照。<https://www.facebook.com/iinohighschool>



校外を頼る

…学校の外にも頼れる人を見つける

多様な人が「ふらっと」に学校を訪れ、生徒が会いたい人を見つけては「ふらっと」に地域へ飛び出す、そうした探究活動を推進。

外に出る価値を自分が体感すると、 多様な社会とつながりたくなる

教育活動で、校内だけでなく「校外を頼る」こともするようになったのは、前任校で全国の先生が集まる研修に参加させてもらったのがきっかけです。外に出ないとわからない世界があると痛感したのです。以来、地域の集まりなど「自分の未経験な○○」に出会える場へ、意識的に足を運ぶようになりました。外に出ると、最初は少しずつ、しかしハブとなる方と出会うと加速度的に人の輪が広がることも知りました。

出会えた方とは「いずれ何か」の社交辞令の関係で終わらせないようにしよう、とも思ってきました。教育関係者なら、本校教員の課題感と重なる点から校内研修を企画したり、生徒に会わせたい魅力的な方がいれば、放課後イベントなど校内での承諾を得やすいところから企画したり。

外の世界にふれると「異なるものの見方」を知り、その視点で物事を捉え直すことで、今まで見えなかったものが見えてきます。自分と照らし合わせるなかで「見方の癖」に気づかされ、捉え方を見直すことでより自由な発想ができるように。いわば「見る」を知る。生徒でも教員でも、社会とつながる価値はまさにこうした点にあるのだと思います。

札幌西高校(北海道・道立)
探究推進委員長 館 龍之介先生

全日制と定時制がある。同校の探究活動では「問い」と「出会いと対話」をキーワードに置いている。詳細は以下のサイトのレポートや動画を参照。<https://www.mmfe.or.jp/partners/5411/>



小さく始める

…できる範囲から始めて広げていく

1年生は小課題研究。2年生は「地域活性化のグループ探究」「理数分野のグループ探究」「テーマ自由の個人探究」のいずれかを行う。

今の学校にあるリソースを生かしながら、 新たなことにも挑戦する

本校では、地域活性化に挑む探究学習を10年間継続してきました。探究の経験を進路につなげる生徒も現れ、成果を感じています。ただ、地域に目が向くあまり、自分の興味・関心をほかに広げられない生徒もいました。そこで大枠は変えずに「小さく始める」ことのできる要素を加えました。昨年度は、地域活性化のグループ探究を基本としつつ、個人探究や、理数分野のグループ探究も、生徒の希望に応じて選べるようにしたのです。「生徒一人ひとりの興味・関心が引き出されるようにする」ためのマイナーチェンジでした（中村先生）

探究学習は、総合的な探究の時間に行うのが原則ですが、個人探究の生徒が美術部の活動でも進められるようにしたり、理数探究の生徒が放課後にも実験できるようにしたりと、個別に柔軟性も高めています。前任校でも教育課程外の夏休みに地域連携講座を設けていましたが、社会に開かれた教育は、できる範囲から「小さく始める」のが良いと感じています。そのうえで、なぜそれを行うのかという目的を、校訓やスクール・ミッションを参考に「わかりやすい言葉」に落とし込み、皆の意識をつなぐことが大事だと思います（鈴木先生）

斐太高校（岐阜・県立）
探究活動推進部長 中村香月先生／
3年次主任 鈴木泰輔先生

岐阜県「地域課題探究型学習推進事業（教科横断型）」指定校で、地域の未来を担うリーダー育成を目指す。昨年度の探究活動の成果発表は以下URLを参照。<https://school.gifu-net.ed.jp/wordpress/hida-hs/2025/01/29/>



磨き込む

…よりよい活動に進化させていく

地元の企業や行政、大学、研究機関筑波学園の研究都市とも連携して「課題研究」(理数科)や『夢現∞プロジェクト』(文理共創科)を行う。

探究における生徒同士の関わりや、外部との関わりが深まるように

本校では7年前から、企業や市役所、大学の方などと連携する探究活動を始めました。そしてやるからには、毎回前年以上のものにしようと「磨き込む」ことを続けてきました。

特に意識したのは、探究をする生徒たち自身にブラッシュアップしてもらうことです。我々と一緒に探究活動の運営をしたい生徒を毎年募集し、意見をもらって反映してきました。3年生になった生徒が、新2年生の探究の相談にのる体制も整えました。生徒たちは自走するようになり、今では協力を仰ぎたい外部の方も自分たちで見つけてきます(田所先生)

私はコーディネーターとして4年前から外部調整などに関わってきました。心がけているのは、お互いがWin-Winとなるように関係性を磨いていくことです。例えば成果発表会に招待するときは、生徒と直接対話できる時間となるべく作ります。生徒の学びが深まり、外部の方からすれば「自分たちの業界に生徒が興味をもつきっかけ」の場にもなるからです。生徒たちには、いろいろな生き方をする大人と出会い、こんな世界もあるんだと引き出しを増やしながら、自分にあった将来を見つけていってほしいと願っています(真子氏)

八幡高校(福岡・県立)
進路部キャリア教育課長 田所優果先生/
コーディネーター 真子静佳氏

理数科と文理共創科(2024年度に普通科より改編)がある。教科科目横断型授業や探究活動を推進。文理共創科の『夢現∞プロジェクト』は以下学校HPも参照。<https://yahata.fku.ed.jp/> >文理共創科>夢現∞プロジェクト